埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

Externalization of Disease in Tudor Interludes : Pox and Nice Wanton

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-02-14
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 米村, 泰明
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/465

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

インタールードにおける病の外見化
― 梅毒と『浮気女』―

Externalization of Disease in Tudor Interludes
Pox and *Nice Wanton*

米　村　泰　明
YONEMURA, Yasuaki

はじめに

チューダー朝インタールードには、道楽息子や娘が享楽的な生活に耽って学問をないがしろにしたために破滅していく様を描く作品群がある。本稿で扱う三作品、R. Wever作とされる『陽気な若者』（*Lusty Juventus*, 1550?）、Thomas Ingelend作とされる『浮気女』（*Nice Wanton*, 1550?）と『我がまま息子』（*The Disobedient Child*, 1560?）、さらにはW. Wagerの『馬鹿は死ななきゃ直らない』（*The Longer Thou Livest the More Fool Thou Art*, 1559?）、そしてAnthony Rudd作とされる『ミソゴヌス』（*Misogonus*, 1571?）などである。中心的な登場人物は若者であり、子供たちを正しくしつけられない親に対する批判や、教育の重要性を理解できない若者への警告が主要なテーマとなっている。P.W. Whiteは、いずれも作者が教育関係者であったり、上演がグラマースクールの生徒やその親たちを対象としたものであると分析している。[1)]

これらの作品に共通するのは、従来の道徳劇が持つ善と悪が無垢な人間の魂を奪いあうというプシュコマキアの構造を踏襲しつつも、宗教的美徳よりもプロテスタント的傾向によって世俗性の高まりが見られることである。『万人』に代表される初期道徳劇の主人公は悪にも善にも染まっていない無垢な状態から人生の旅路を始める。彼らは「白紙状態」であって、悪徳に誘惑されて道を踏み外すが、結局は悪徳に裏切られ、美徳に諭されて改悛し、神の恩寵を得て救われる。しかし、ピューリタンたちは人間は生まれながらにして悪へ向かう傾向をもっていると考えていた。[2)] 生まれつき悪に染まりやすい性向をもつ若者に正しい道を歩ませ、また道に迷った時に引き戻すために必要なものは、アレゴリカルな神学論争から世俗的な学校教育に変化した。彼らに必要な恩寵は学校に行って神の言葉を学ぶことによってのみ得られるのである。

教育が演劇作品のテーマとなるには、宗教改革の影響があった。イングランド演劇にピューリタン的視点をもたらした嚆矢はジョン・ベイル（1495-1563）である。カトリックの修道院で成長したベイルはやがて反カトリック的、親プロテスタント的傾向を見せるようになる。そのきっかけはヘンリー八世による1534年の「国王至上法」の発布であった。

キーワード：インタールード、梅毒、『浮気女』、『我がまま息子』、『陽気な若者』
Key words ：Interlude, Pox, *Nice Wanton*, *The Disobedient Child*, *Lusty Juventus*

これによって、イングランドの教会はローマ教会から決別することとなった。それを契機にベイルはローマ教皇の腐敗ぶりを激しい言葉で攻撃し始める。ベイルの作品に特徴的に用いられる修辞は、イングランドにおけるカトリックによる犯罪的行為の数々を病に見立てるものであった。その病の感染源として槍玉に挙がるのはローマ教皇である。ベイルは演劇を反カトリックのプロパガンダとして用いたのである。[3)]

Whiteは別の論文で、ベイルの作品が「発展途上のヘンリー的プロテスタンティズム」を強調していたとすれば、ベイル以降の作品群はヨーロッパからもたらされたカルヴァン主義の受容を反映していると述べている。[4)]

当時のイングランドの人口も影響していた。人口三百万人のうち、半分が20歳以下だったという統計をWhiteは紹介している。政治的、宗教的優位性を争う者たちが、彼らを自分たちの側に引き付けることは至上命題だっただろう。学校教育に取り入れられていた演劇が若者に向けてのものであったことも、それをプロパガンダの手段だったと考えれば、首肯できるだろう。カルヴァン主義者は師弟の育成と教育に大きな関心を持っていた。その陣営に属する作者が教育と親の在り方に関わるメッセージをもつ作品群を生みだしたのは必然であろう。ヘンリー八世の後を継いだエドワード六世の治世は短かったが（在位1547-53年)、熱心なプロテスタントであった。チューダー朝の劇作家たちが時代の潮流に強い影響を受け、作品の中に宗教的・社会的なメッセージを込めたのである。

上記の作品群に共通するもう一つの側面は、ベイルほどの激烈さはないものの、ペストや梅毒などの感染性の病を間投詞として、あるいはカトリックの腐敗や堕落のメタファーとして用いていることである。プロテスタント的立場から若者の教育問題を扱った上記の作品群の中でそれが最も顕著な形で表れているのが『浮気女』である。

本稿ではまず『我がまま息子』と『陽気な若者』を取り上げて、プロテスタント的立場からの教育問題を扱ったインタールードの特徴を概観する。その後で、『浮気女』をとりあげ、親に甘やかされた若い娘が実際に梅毒に冒されて死亡する展開を通して、病と反カトリック思想がどのように利用されているかを読み解く。

『我がまま息子』

『我がまま息子』[5)]は従来の道徳劇の形式を踏まえながら、より世俗的な構造を用いて、巷間に流布している「道楽息子の帰宅」[6)]の結末に変化を加えた興味深い作品になっている。直接的に病に言及することはないが、『陽気な若者』『浮気女』を検討する前に、劇の構造と教育の重要性の観点からこの作品について考えておくことは有益である。

主人公は、学校で学ぶことが将来の幸福につながると言う父親の言葉に耳を貸さず、働くことも拒否して、若いうちに妻を持ちたいと我がままを通す。幼年時代を楽しく過ごした彼にとって学校へ行くことは「天国から追い出され、痛みと災い、悲しみと苦難を得る」ことに等しいと主張する。“For if I should go to my book after your advice, / Which have spent my childhood so pleasantly, / I may then seem driven out of paradise, / To take pain and woe, grief and misery.”（47頁）父親は学びの苦しみの後にその報酬として喜びが待っていると諭すが、息子は学校での厳しい体罰

とそれによって死んでしまった生徒の話を引き合いに出して、どうしても学校に行こうとしない。彼が望んでいるのは、結婚である。父親は伝統的な反女性的立場から、結婚生活が男にとってどれほど厳しいものになるかを告げるが、息子は耳を貸そうとはしない。ついに父親は息子を甘やかした結果こうなったと悟り、言うことを聞かなければ財産は与えないと宣告する。息子は必ず後悔するという父親の言葉を無視して家を出ていき、身分違いの文無し女と結婚する。息子は妻との生活が父親に警告された通りに進んでいくことを身をもって体験する。派手な結婚式に大金を使い、しかし収入がないために横暴な妻に暴力をふるわれ、薪を売り歩き、床磨きまでするように命じられる。息子は妻が遊びに外出したすきに、父のもとに帰ろうと決意する。結局は父親が正しかったことを知るのである。息子はおのれの愚かさを悔いるが、父親はそのような惨めな生活は父親の意見を無視した息子自身が招いたものだとして、必要最小限のもの与えて、妻のもとに帰るように命じる。

従来の道徳劇のパターンから外れている点がいくつかある。まず息子が無垢な人間として登場するのではなく、すでに労働を忌避して安逸を求め、さらに結婚に対する誤った考え方の虜になっている点である。プロテスタントにとって結婚は神聖なもので、それゆえにこそ婚外の性交渉や売春を糾弾したのである。息子が結婚を望む理由は、必ずしも肉欲ではなく、自分は美しいのだから妻が必要だと言うものである。結婚の神聖さと義務の重さをまったく考慮していないことが問題である。すでに息子は正しい道を踏み外しているのだ。

この作品に唯一登場する寓意的人物である悪魔は、一か所だけ与えられている台詞の中で、災いの種をまいたのは自分であり、若者に知恵、善、美徳、学問をさげすむようにさせ、父親に背かせたと述べている。“It was only I that this strife did sow”“I that made him to despise / All wisdom, goodness, firtue, and learning”“ I that made him refuse / The wholesome monition of his father dear”(80頁)したがって、この作品の悪魔は従来の道徳劇・インタールードのように息子を悪の道に誘うように接触する必要はないのである。序詞役が「全世界で悪徳がはびこり、美徳は衰え不正が支配している」“Throughout the whole world in every land, / Vice doth increase, and virtue decays, / Iniquity having the upper hand”（45頁）と述べているのはその反映である。「不正」“Iniquity”はしばしば悪徳の一人として道徳劇・インタールードに登場する。しかし、この作品では寓意的人物としては登場しない。また息子に関して「神の恩寵を全く欠いている」“clean devoid of grace”(45頁)、「(妻を娶ることによって）肉欲を思いのままに満たす」“of lust he might have his fill”（46頁）とも語っているが、悪徳のキャラクターとしての「肉欲」も、息子から恩寵を奪う神も登場しない。一方父親にはあまりにも息子を甘やかしたことを悔いる台詞が与えられていることから、はからずも父親が悪徳の役割を果たしてしまったのだとも言えるだろう。

息子を善導し改悛させようと働きかける寓意的な美徳も登場しない。[7] 息子への警告はすでに父親によって与えられている。美徳が無垢な人間に諭す神学的な教えは、息子に良い暮らしをさせようとして父親が力説する、教育と労働の必要性という極めてピューリタ

ン的な人生訓に代わっている。そして息子には過ちを後悔する機会は与えられているが、究極の救いはもたらされない。

故郷に戻り、父親が登場するまでの36行あまりの台詞の中に、息子が自分の犯した過ちを認識していることが読みとれる個所がある。彼はまるで「知恵と理性を失ったもの」“lacked both wit and reason”のように「学校で授業に耳を貸さず、心が教員たちを嫌悪していた。教科書など華奢な指にはふさわしくないと思っていた」“I could not abide of the school to hear; / Masters and teachers my heart abhorred; / Methought the book was not fit gear / For my tender fingers to have handled”（84頁）と過去を振り返る。今ようやく彼はそれこそが自分にとって良いものであったことを学んだのである。しかし、イエスの譬とは違って、この放蕩息子の帰宅は父親から拒否される。息子の魂が救われるためには、妻のもとに戻り、正常な夫婦関係を確立し（そのためには彼が妻を正しく導かねばならない）、正業について働くしかない。しかし、それが可能だと予感させるものはないのである

最後に登場する「納め口上役」はこの作品の論点が、息子を正しい生き方へと導く父親の役割にあることを解説する。それを幼いうちに行っておくことの重要性を、口上役は若者を木の若枝に喩えて説明する。若い枝は柔軟で修正が効くが、成長して堅くなるとそれは不可能になるのである。当時の劇作家やモラリストたちは若者を若木の間は柔軟性があるが、成長するにつれて形を整えるのが難しくなる樹木に例えるのを好んでいたとWhiteは言っている。[8] この譬は『陽気な若者』でも繰り返される。

『陽気な若者』

『陽気な若者』では病や感染、そして治療に関する言葉が用いられていることに注目する。

「使者」が述べるプロローグは「人間は生まれつき若いころから悪に染まりやすい性質がある」“For as much as man is naturally prone / To evil from his youth”（３頁）というプロテスタント的メッセージで始まる。『我がまま息子』でも言及したように、従来のカトリック的視点での道徳劇は、無垢な人間の魂が悪徳に誘惑され堕落し、美徳の助力によって改悛し神の慈悲によってその魂が救われるというパターンを踏襲していた。しかし、プロテスタント的な道徳劇やインタールードでは、その前提に変化が見られる。人間は悪に染まりやすいものなのだ。したがって若者に「悪から遠ざける知恵をつけさせ、神の法を教え込むために、手を抜いてはならない」“no labour refuse / To train him to wisdom and teach him God's law”と「使者」は言う。それも若いころに始めなければならない。「使者」は聖書外典『ベン＝シラの知恵』３：８から「慣らさぬ馬は強情となり、わがままなる子はかたくなとなる」を引用する。[9] 若者には好き勝手にさせず、知恵がつくように訓練し、神の法を教えなければならない。「というのは」と使者は言葉を続ける、「若者は意志が弱く、恩寵によって善に向かうが、生まれつきによって悪に引き寄せられるからである。人間の生まれつきというものは深く根ざしており、容易に打ち消すことはできない。」“For youth is frail and easy to draw / By grace to goodness, by nature to ill: / That nature hath ingrafted, is hard to kill.”「深く根ざす」

に対応する“ingrafted”は「接ぎ木」を行う際の用語である。人間性にすでに根を張ってしまっている悪に向かいたがる性質の根深さを表している。だからこそ、若いころのしつけが大事なのである。「使者」は続ける。「若いころならば、人は神の御業によって美徳へとしつけることができる。悪徳は抑制され、鎮圧されるのでほとばしり出ることはなくなる」“Nevertheless, in youth men may be best / Trained to virtue by godly mean; / Vice may be so mortified and so suppressed, / That it shall not break furth”しかしこのプロセスが完全に行われることは期待できない。「その根は残る」“yet the root will remain”からである。悪徳という「接ぎ木」の「根」がいかに深く人の心に入り込んでおり、それを根絶やしにすることの困難さを強調している。

「使者」によるプロローグが終わると、「若さにこそ快楽がある」“In youth is pleasure”（４頁）という歌を歌いながら「若者」が登場する。彼が何よりも求めているのは愉快な仲間である。そこに登場する「良き忠告」（Good Councell）が快楽ではなく時間を正しく使うように諌める。「若者」は己の欲情を追い求め、無知に導かれていたことを反省し、よりよい知識を得たいと述べる。「知識」（Knowledge）との問答の中で、若者はこれまで長老たちに誤った教えを受けていたことに気づく。正しいキリスト教徒としてどのように生きるべきかを問う若者に、「知識」は神を恐れ、神の約束を信じることを教え、「良き忠告」は聖書を渡す。「若者」に誤った教えを授けた長老たちはカトリックに属している者たちである。「知識」が「若者」に新約聖書を渡すのは、彼らの過った教えから「若者」を守るためである。聖書を読んで神の法を知ることこそ教育なのである。[10)]

「知識」は「この（聖書の）中には困難、迫害、病、逆境にあっても最も有益な予防薬がある」“Therein shall you find most wholesome preservation / Both in troubles, persecutions, sickness, and adversity”と告げる。（13頁）“preservation”には、OEDのB.1.aが定義する“A medicine that preserves health, protecting from or preventing disease, a safeguard against poison or infection.”「健康を維持し、病から身を守りあるいは予防する薬。毒物や感染から身を守るもの」という意味がある。「困難」「迫害」「逆境」という霊的、精神的、物理的な状態のみならず、人間の身体に不具合が生じた「病」のカテゴリーにあてはめれば、聖書はまさに「最も効能ある」薬として機能するのである。誤った古い教義から身を守る聖書を腰に吊るすことは、したがって、聖書を病から治療する薬に擬して持ち運ぶことに通じる。

しかし、予防薬としての聖書を所持していても、それだけでは肉欲の誘惑には勝てないことを「若者」は体験することになる。

悪魔が登場してプロテスタント的価値観の進展により古いカトリックの教えが排斥されていることを嘆く。古い人間は悪魔の法、すなわちカトリックを信じているが、若者たちはプロテスタントに宗旨替えしてしまった。彼らは古くて人が作った伝統を信じずに、聖書の教え通りに生きると言っている。したがって「若いうちに道を誤らせ」「若者の心を聖書から肉欲“carnal pleasures”に向かわせねばならない」のである。「さあ、急いでこの若者を感染させてやろう、我が息子「偽善」の誘惑を通して」“Well, I will go haste to infect this youth / Through the enticement of

my son Hypocrisy”（15頁）ここには中世からチューダー朝までのイングランドの歴史を通して繰り返されてきた疫病の流行を念頭に置いた、原因（肉欲）と感染経路（「偽善」）、そしてその結果としての霊的な堕落、すなわち精神的な病の状態、という流れが読みとれる。

悪魔が息子と呼ぶ「偽善」[11] はこれまで悪魔の法と力を世界にはびこらせてきた。「今でも外国では支配権を行使している」“Do not I yet reign abroad?”（16頁）という台詞は、スペインやフランスを筆頭にローマカトリックがいまだに権勢をふるっていることを示唆している。彼が神の言葉を誤らせるために用いてきたのは偶像崇拝、男色、迷信などである。神の教皇を頂点としたカトリック教会の階層組織は「偽善」が作り上げた荘厳な式服や聖像、免償証書、聖遺物などを用いて悪魔を崇拝させてきたのである。[12]

悪魔の要請に従って「偽善」は「友情」と名前を変えて邪悪な仲間とともに「若者」に近づくことにする。「偽善」も感染という言葉を使う。「邪悪な仲間とともに奴を感染させてやる。肉欲の付き合いになる、そうとも、無垢な奴を打ち負かすだろう」“I will infect him with wicked company, / Whose conversation shall be so fleshly, / Yea, able to overcome an innocent”（19頁）疫病の感染経路としてもっとも日常的なものは性的交渉であり、それをもたらすものが肉欲である。「偽善」は言葉を続けて、「若者を肉欲に耽らせてやる」“Youth shall live carnally.”（20頁）と言う。

「偽善」は手下の「仲間」とともに若者を売春宿に連れていく。若者を誘惑するのが娼婦の「悪しき生活」（Abhominable Living）である。「偽善」は彼女を「知られざる正直者」（Unknown Honesty）と呼ぶ。「偽善」の思惑通り、言葉巧みにそそのかされた若者は自分から積極的に彼女に口づけを繰り返す。肉体的な接触による感染を視覚化した場面である。若者は「悪しき生活」と二人だけになろうとする。それが性交渉への期待であることを観客は容易に理解するだろう。

「良き忠告」は、自分と「知恵」の説得にもかかわらず堕落した若者の姿を見て嘆く。「神の法に記されているplaguesがお前の上に降りかかっている」“The terrible plagues, which in God's law are written, / Hang over thy head both early and late.”（34頁）ここで「良き忠告」が口にする“plagues”は、若者が置かれている霊的な状態を表しているとともに、イングランドでも長期にわたって猖獗をきわめたペストを思い起こさせる。その連想で「良き忠告」も肉欲を表す“flesh”という言葉を繰り返し使う。“O fleshly Carpernite”はカトリックの教義である全質変化を信奉する者たちを指す。若者がカトリック側に取り込まれたことを嘆いているのである。“thy fleshly swinish lusts and abhominable living”は若者が豚のような肉欲と悪しき生活におぼれていることを非難する台詞である。“You said such fleshly fruits should not be seen”「お前はそのような肉欲の果実には目もくれぬと言ったではないか」と、若者が自分とかわした約束を忘れていることを批判する。“all that ever you devise, / Is to maintain your fleshly liberty”（35頁）は若者が「偽善」にたぶらかされて、おのれの肉欲の赴くままにすることしか考えていないことに対する批判である。他にも「良き忠告」は精神と対照的に堕落しやすい肉体に関する聖パウロの言葉

を引用して若者を批判する。[13]

これら一連の「良き忠告」による激しい批判に若者は後悔し、地面に倒れ伏す。従来のカトリック的視点に立つ道徳劇であれば、自分の罪を認め、それを告白し、贖罪の過程を経験した後に救済がおこなわれる。[14] この作品では、「良き忠告」と「神の慈悲深い約束」が、聖書にある神の言葉を信仰することで救済が行われると告げる。「神の慈悲深い約束」は心を入れ替え自分の方を向くように若者に忠告する。「そうすれば私はお前が道を踏み外した原因を癒すであろう」“I shall remedy the cause of your departure”（38頁）「神の慈悲深い約束」は医者として若者の病を治療するのである。

「若者」が腰に吊るした聖書を読むことで神の言葉を理解し、それが自分の罪を知ることにつながり、さらに悪徳に感染させられた病から癒されるというプロセスこそ、魂の争奪戦に代わる感染症との闘いであり、学ぶという行為が悪徳にとっての脅威となっていることを示している。その経緯の中で病の源がローマにあるというプロテスタントのメッセージも抜け目なく提示されているのである。

『浮気女』

『浮気女』は同様のジャンルに入る『我がまま息子』の作者でもあるトマス・インゲレンドが1550年前後に執筆したと考えられている、600行に満たない短い劇である。短い作品ではあるが、正しい生き方を勧める兄の言葉に背き、学問を放棄して快楽に身を持ち崩した女性の登場人物が梅毒に冒された姿を舞台上でさらすなど、ビジュアルな効果を観客に与える作品でもある。『陽気な若者』では、病や治療に関わる言葉が発せられて、観客に疫病の記憶を喚起していたが、『浮気女』では、梅毒に冒された女の姿を舞台上で見せることで、より直接的に視覚に訴えている。父親と息子ではなく、母親と娘の生き方に焦点が当てられているのも特徴的である。

『浮気女』には三人の兄弟姉妹が登場する。長男のバーナバズ、次男のイシュマエル、そして妹のダリラである。長男は勉強好きで弟と妹に学校へ行き学ぶことの重要性を諭すが、イシュマエルとダリラは兄の諫言に耳を貸そうとはしない。バーナバズは、『陽気な若者』のプロローグでも引用される旧約聖書外典「ベン＝シラの知恵」から、「人間は若いころから悪に向かう傾向がある」という言葉を学校で学び、それが弟と妹にあてはまっていることを心配する。バーナバスの悩みは、学問嫌いで享楽的な二人のことだけではなく、その二人を擁護する母親にもある。母親が鞭打つのは怠惰な二人ではなく、無理に学校に行かせようとする自分だと言うことを彼は知っているのである。バーナバズは特に妹のダリラが乙女にふさわしく「糸巻きと縫物、誠実勤勉な家庭の主婦として身につけるべき事柄」を学んでいないことを危惧している。

しかし二人は兄の忠告には耳を貸さず、学業を放棄して楽しく過ごすことしか念頭になり。『陽気な若者』の主人公が腰に新約聖書を吊るすのと対照的に、二人は教科書を放り投げて遊びに行くのである。[15]

隣人の妻ユラリアもバーナバスの危惧を共有している。一般論として子供のしつけを放棄している親が多いこと、さらには自分の子供も親の言うことを聞かないと嘆いていると、兄弟の母親であるザンティッペが登場する。[16] ユラリアがバーナバズを賞賛し、イシュマエルとダリラの不品行を非難すると、ザン

ティッペはむしろバーナバズを愚か者扱いし、残る二人を擁護する。『我がまま息子』と『陽気な若者』では、息子に関わるのは父親であったが、この作品では母親による子供たちの教育放棄が取り上げられているのである。

母親が退場した直後にイシュマエルとダリラが「不正」（Iniquity）と共に登場する。この場面では、ダリラの処女問答が繰り広げられる。「不正」が「こんなに長い間処女だったことを後悔したんじゃないか」とからかうと、ダリラは自分はまだ処女だと反論する。しかしイシュマエルが「お前の処女膜は悪臭を放っている」と嘲る。ダリラは抗弁するが、彼女が純潔を失ったことは明らかである。そしてこのことは身体的にはもちろん、霊的にも堕落したことにつながる。イシュマエルから「売女」“whore”と呼ばれるダリラは、いずれ性病に感染するであろうことを観客に予感させるのだ。

ダリラが売春に身をやつすきっかけはサイコロ賭博である。「不正」との勝負でイシュマエルは有り金をすべて巻き上げられ（その結果彼は泥棒に落ちぶれる）、ダリラは賭けには勝ったがその金を「不正」に取られてしまう。「不正」は観客に向かって二人を「病んだ木の二本の接ぎ木」“Two graffs of an ill tree”（104頁）と罵しる。『陽気な若者』で用いられた「接ぎ木」のイメージがここでも繰り返されている。

「不正」が退場した直後にダリラが「襤褸に身を包み、顔を隠し、醜く変形した姿で、杖に身を預け」て再登場する。“Dalilah cometh in ragged, her face hid, or disfigured, halting on a staff.”これは明らかに梅毒の症状である。[17)]

ここから始まる彼女の嘆きは、この身体を醜悪に変形させる病を生々しく描写する。「私の腱は縮かみ、肉体は瘡毒に食われ、骨はうずき、痛む。かつては金髪をいただいていた頭から髪は抜け、背は曲がり赤子のように地を這う。目はぼやけ、手はぶるぶると震える。胃袋はあらゆる食物を受け付けない…かつては美しく好ましい顔立ちだったのに、今や汚れて見るも恐ろしい。」“My sinews be shrunken, my flesh eaten with pox; / My bones full of ache and great pain: / My head is bald, that bare yellow locks; / Crooked I creep to the earth again. / Mine eyesight is dim, my hands tremble and shake: / My stomach abhorreth all kind of meat: / … / Where I was fair and amiable of face, / Now am I foul and horrible to see”

彼女は言葉を続けて、これもすべて「犯した罪にふさわしく神が私を苦しめているのです」“Justly for my sins God doth plague me.”（105頁）と言う。罪の結果が病という形で自分の身体に降りかかってきたことを彼女も理解しているのである。

しかしダリラは両親を批判することを忘れない。「両親が私を甘やかした。悪いのは彼らだ。過ちを正すことなく悪の中に放りっぱなしにしていた」“My parents did tiddle me: they were to blame; / Instead of correction, in ill did me maintain”彼女は、作品の主要なテーマである、親が子供の教育に関して持つべき責任を問うている。道徳劇で人間が自分を誤らせた悪徳を告発するように、ダリラは自分とイシュマエルを甘やかし過ちに至る前に正さなかった母親を非難する。それはダリラに与えられた役割である。しかし、同時にこれは責任転嫁にすぎない。「決して死ぬことのない良心という虫が日ごとに私を告発してや

まない」“The worm of my conscience, that shall never die, / Accuseth me daily more and more.”と言っても、彼女は改悛のプロセスに完全には入っていないのである。「良心という虫」のメタファーは瘡毒が体内を蠢き、骨を腐らせるさまを想起させるだろう。

この女の姿を見たバーナバズは、最初はそれが自分の姉だとは気付かない。彼は醜く変形し自分の足では歩くこともままならない女を見て、彼女が時の過ごし方を誤った結果このような姿になったことを理解し、悔い改めることにより健康と恩寵を神から再び授けられるようにと諭す。“Although your time ye have misspent, / Repent and amend, while ye have space, / And God will restore you to health and grace.”彼の役回りは病を神学の観点から解釈し、そのメッセージを観客に伝えることである。バーナバズは、言葉には出さないが彼女の姿を見て、その病が梅毒であり、治療法は悔い改めによる神の恩寵しかないことを主張しているのである。

しかしダリラ自身すでに健康体に戻ることはできないことを認識している。彼女はバーナバズに金銭的な施しを求め、このままで生きていくと告げる。「もはや健康を回復する時は過ぎました。病が私をこのような腐敗に追いやったのです」“To be restored to health, alas, it is past; / Disease hath brought me into such decay.”バーナバズには彼女が罪を悔いているのか、それとも現在のみじめな状態を悔いているだけなのか確証はない。それでも神の許しを得るためにこれ以上の罪を犯さないように忠告し、せめて身体が治癒するように助力を惜しまないことを告げ、二人は退場する。

ダリラの最期は舞台上では描写されない。彼女の死を告げるのは「この世の恥」(Worldly Shame）である。悪徳の立場から物語を総括する台詞の中で、イシュマエルとダリラの二人を罠にかけたのは自分であると白状し、その結果「我が娘」ダリラは梅毒で死亡したことを観客に告げる。“Dalilah my daughter is dead of the pox”（111頁）二人の不品行を称揚していたと批判される母親のザンティッペが台詞の途中で登場すると、彼女に面と向かってダリラが「売春宿で罹患した梅毒によって死亡」“The fair wench, your dear daughter Dalilah, / Is dead of the pox taken at the stews”[18] したと告げる。そのうえで彼女こそ二人の死の原因であると指摘するのである。“The cause of their death was even very you”これが観客への警告となっていることは自明である。

舞台上での病の外見化

梅毒は1494年のフランス王シャルル八世のイタリア遠征によってヨーロッパにもたらされたというのが定説になっている。イングランドにはフランス経由の病としてFrench Pox、フランスでの呼び名であるSpanish Pox、あるいはSickness of Naplesなどと呼ばれていた。イングランドへの侵入は1500年ころに始まっていたようだ。[19]

イングランドにおいては、梅毒の流行が続いていたにもかかわらず、英語で書かれた医学書の登場は遅かった。Fabriciusによると、1533年にドイツ語から、1543年にはラテン語からの翻訳書が出版され、1547年に英語で執筆された要諦書に梅毒への言及がある。その後は1562年と66年の英語の医学書にも言及がある。[20] このように概観すると、Creightonが言うように、チューダー朝における梅毒に

関する著作の少なさは注目に値する。Creightonは、梅毒に関して英語で書かれた最初の医学的な著作は、1576年のウィリアム・クロウズの『簡潔にして有益なフランス病と呼ばれる病の塗布剤による治療に関する論考』であると言う。[21] クロウズはロンドンの聖バルトロメオ病院の医師であり、実際に患者を治療しつつ、ヨーロッパにおけるこの病に関する著作も参考にして執筆している。『浮気女』の制作時期から考えてウィーバーがこの論考を読んでいたとは考えられないが、その症状は（病院に行かない患者も数多くいたであろうことを想定すると）公衆に広く知られていたことであろう。

クロウズの論考は梅毒の症状を次のように記述している。彼の患者には幼い子供たちも含まれていた。通常この病は健全ならざる性交渉によって感染すると考えられているが、診察の結果子供たちの局部には異常はなかった。ある12歳の少女は「体中の多くの部位に痛みをもたらす結節、膿瘍そして潰瘍ができており、骨も腐敗して」いた。クロウズは感染経路として「汚れた女性たちとの交遊」が一般的であるが、それ以外にもこの少女たちのように、「感染した乳母の汚染した母乳を通して感染させられた」ものもいたと考えた。「この病気は多くの場合、既に感染しているものと飲食をともにすることで口中で生まれ、時には感染者の衣服を身にまとうことで体の他の場所で発生します。ときには、感染者と一緒に寝る、あるいは感染者が使ったのと同じシーツで寝ることでも生まれます。ときには感染者がよく使う便器に腰を下ろすことで感染するともいいます。また、ときにはこの病が既に治癒したものが、感染していときに着ていた服を着ることで再度罹患する」と言う。[22] クロウズは中世以来の医学者たちの典籍に準拠して、体液の異常をこの病の原因と考えていた。体液の乱れが原因となって「それが生命力を消耗させるということです。その影響はこのようなものです。血液を汚濁させ、全身を毒し、その部位に苦痛と痛み、潰瘍、結節、そして汚らわしいかさぶたを生じさせるのです。その兆候と好ましからざる症状はほとんどの場合、悪臭を放つある種の固さを伴った不快な膿疱が頭や前頭部、額や顔面、あるいはあご、そして体の他の部分、特に局部の辺りや下腹部、あるいは、特に乳幼児の場合には口角にみられます。喉や口の中にできる胼胝状のもの、頭痛、関節の痛み、特に肩甲骨、腰、大腿部、そして膝。痛みはほとんど夜に襲い、日中には止みます。目が覚めたときには、まるで体が砕かれたかのような、ある種の重苦しさと堪え難い痛みを感じます。微熱を帯びるときもあります。恥骨のあたりの腫れ物、多くの場合は結節、骨の腐敗を伴う不快な膿瘍」という症状が出るのである。第７章では50歳の鍛冶屋の症状について「感染は彼の体のあらゆる部分に広がり、すなわち硬性下疳、刺すような痛み、毒性があり腐食性の潰瘍、骨の腐敗、そして関節の痛みを伴って」いたと書いている。ダリラが言及している髪が抜ける症状についてはクロウズは言及していない。

ダリラが語る症状には、クロウズが描写する患者の症状と一致するものがある。この作品が教育的意図をもって学校で上演されたのだとすると、観客である若者には強烈な印象を与えたことだろう。ルターやカルヴァンなど宗教改革の先導者たち、あるいはプロテスタント的な社会改革者たちはカトリックが求めていた厳しい禁欲主義（実際にはそれが表

向きでしかなく、聖職者たちの性的紊乱が目に余るほどだったことは多くの資料に残されているが）から距離を置いてはいたが、売春は決してこれを容認しようとはしなかった。イングランドの社会改革者フィリップ・スタブスは、プロテスタントの立場からその著書『悪弊の分析』*Anatomy of Abuses*（1583年頃）の中で売春を恐るべき罪として弾劾し、売春婦に対して「焼けた鉄で顔に烙印を押す」という目に見える形での厳しい処罰を要求している。[23)]

ダリラが舞台上で見せる姿は、まさに神によって下された処罰の外見化[24)]である。疫病の流行の原因や、病が患者の身体を醜く崩壊させる症状を純粋に病理学的に捉えられる発展段階ではなかった。カトリックの時代におけるペストと同様に、宗教改革時代の梅毒も神学的に解釈された。原因は患者の霊的な堕落であり、その結果が身体の変形として現れるのであった。

結　論

上記の三作品はイングランドにおける宗教改革がもたらした教育への関心の高まりを反映している。カルヴァン主義を特徴づける新約聖書の神の言葉を読むこと、両親が子供たちに適切な教育を与えることの重要性がいずれの作品においても底流となっている。

『陽気な若者』で若者が新約聖書を腰に吊るす場面と『浮気女』でイシュマエルとダリラが聖書を放り投げる場面は、神の言葉に近づくことにより救いの道が開ける主人公と、それを放り捨てることによって滅びの道へと歩みだす姿が観客への警告となっている。

『我がまま息子』の親は息子に修学の重要性を説くが、息子はそれを聞き入れず破滅へと向かう。『浮気女』の母親ザンティッペは学校教育に全く関心を示さず、それがイシュマエルを絞首刑に、ダリラを梅毒による死に追いやる。彼女こそ子供たちを破滅に追いやった原因となるのである。

『陽気な若者』と『浮気女』には病への言及が見られる。前者では主人公が売春婦との接触を望み、後者では主人公が売春婦に身を落とす。婚外の不正な性的交渉は梅毒をもたらし、その症状は身体の醜悪な変形という結果となる。『浮気女』において梅毒は霊的な堕落とそれに対する神の処罰のメタファーなのである。そしてこの病は感染する。悪徳も美徳も「感染」という言葉を多用するのは、プロテスタントが批判する悪習と悪癖を、当時のロンドン居住者の記憶に残り、かつ現在進行形で蔓延する疫病と同一視させる手法なのである。ダリラはそれを自らの身体を持って観客の目に見せつける。演劇という視覚に訴えるメディアが、宗教のプロパガンダとして最も有効に活用されている証なのである。

注

1）P. W. White, *Theatre and Reformation*, Cambridge University Press,（1993）:109-110.

2）White, op.cit. 113.

3）ベイルの生涯に関しては『イギリス中世・チューダー朝演劇事典』139-40頁、作品については223-38頁を参照。またJanette Dillon, *Language and Stage in Medieval and Renaissance England*, Cambridge University Press, 1998, 87-105.

4）P. W. White, “Theater and Religious Culture” in *A New History of Early English Drama*, ed. by Cox and Kastan eds., 133-52

5）『我がまま息子』『陽気な若者』『浮気女』のテキストは、J.S. Farmer編の*The Dramatic Writings*

of Richard Wever And Thomas Ingelend, Barnes and Noble, New York, 1966を使用する。引用箇所の提示はこの版の頁番号で示す。

6）新約聖書「ルカによる福音書」第15章11－32節イエスが弟子たちに与えた譬（parable）のひとつ。ふたり兄弟の弟が父親の財産の半分を要求すると父親はそれを与える。弟は親元を去り、放蕩に身を持ち崩してしまう。罪を後悔し、雇い人のひとりとして受け入れてもらおうと思い父のもとに帰る。死んだ息子が生き返ったのだからと言って父親は息子を歓迎し、盛大な宴会を開いて受け入れる。常に父親とともにいて働いている兄が不平を言うと父親は同様の説明をする。この譬はイエスが罪人たちと一緒に食事をしているとそしられた際に語ったものである。

7）息子が若い娘と知り合って結婚をが決まった後、司祭が登場する。この作品に登場する唯一の聖職者である。彼はあらゆる階級で善性と良心が欠落し、職務怠慢がはびこっていることを嘆く。しかしこれは、息子の結婚式を執り行うために必要な助手が時間通りに現れないことを憤っているだけである。

8）*Theatre and Reformation*, 113.

9）訳文は聖公会出版『アポクリファ―旧約聖書外典―』（1984）による。

10）舞台上で「知識」は若者の腰に聖書をつるしただろう。肌身離さず神の言葉とともにあることを象徴する行為である。また、本作品の若者は聖書を受け取るが、『浮気女』のイシュマエルとダリラは学校へ行くことを拒否して教科書を投げ捨てる。Dillon, 124-26.

11）「偽善」は肉屋、後に登場する「悪しき生活」はメイドと売春婦を兼業していることが台詞の中で明かされる。「若者」がエドワード朝ロンドンの若くて落ち着きのない徒弟の代表とみなせば、この作品は都市を舞台とした若者の教育論として娯楽を求めて劇場に群がる徒弟や若者向けに書かれたのだろうとWhiteは推測している。*Theatre and Reformation*, 111.

12）「偽善」は誓言として“By the mass”“Sancti Amen”という言葉を多用し、若者もまだ改宗していない段階では“By the blessed mass”と誓言する。これはベイルが用いた、カトリックの典礼や信仰とを悪魔と同一視させるための手法である。『我がまま息子』でも同様の誓言が堕落した登場人物によって使われている。L.D. Cox, *The Devil and the Sacred in English Drama, 1350-1642*, 85-86.

13）「良き忠告」の台詞は“you ought your fleshly lusts to kill”である。「コロサイ人の信徒への手紙」第３章第５節に該当し、新共同訳では「だから、地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲を捨て去りなさい」と穏当な表現になっている。「ガラテヤ人の信徒への手紙」からは第５章第17節「肉の望むところは、霊に反し、霊の望むところは肉に反する」が該当する。さらに罪を重ねるものへの警告として「ヘブライ人への手紙」第10章第26節以降「もし、わたしたちが真理の知識を受けた後にも、故意に罪を犯しつづけるとすれば、…審判と、敵対する者たちを焼きつくす激しい火とを、恐れつつ待つことだけです」が引用されている。

14）道徳劇の主人公の改悛は瞬時に行われる。自分が犯した罪を知るという自己認識のプロセスを経験することはない。必要なのは神の許しだけである。しかし、教育に関わるインタールードでは、人文主義の側面もあって、主人公が自己認識を獲得するプロセスを観客に共感させる必要がある。Kent Cartwright, *Theatre and Humanism*, Cambridge U.P., 1999, 53-54.

15）若者が学校での教育を忌避していることに警告を発する作品だけに、彼らが学校へ行くことを拒む理由が詳細に語られる。「夏は喉が渇いて、冬は寒く死にそうになり、いつも怒られるんじゃないかとびくびくしている」とイシュマエルが言えば、ダリラも「夏は日焼けしてしまうし、冬は寒さで五体が凍え、美貌が台無しになる」と同調する。母親のザンティッペもユラリアに対して「一日中学校で叱責を恐れ、少しでも遊ぶと鞭打たれる」と子供たちを擁護している。『我がまま息子』では、教師の厳しい体罰によって生徒が死亡したことが明らかになる。

16）この名前は悪妻として名高いソクラテスの妻を連想させる。『我がまま息子』でも妻の横暴に耐えかねて戻ってきた息子に対して父親が「自分だけがこのような腹立たしい人生を送っていると思うなら、どれほどの悲嘆と悲しみと不満をソクラテスが妻のザンティッペに対して持っていたかを知るべきだ」と諌める台詞がある。（87頁）

17）道徳劇・インタールードで梅毒への言及があるのは稀である。Johannes Fabriciusはこの劇以外には『嘲り屋のヒック』（*Hyckescorner*）と『ミソゴヌス』だけだと言っている。*Syphilis in Shakespeare's England*, Jessica Kingsley Publishers, 1994, 66-67. 前者では美徳の「慈悲」が、ふしだらな宮廷人たちに神が罰として梅毒をもたらしたと語り、後者では道化役がインドにいたころに梅毒などの病気を治療したと語る。登場人物が実際に梅毒に冒された姿を見せるのは『浮気女』だけである。

18）1546年にヘンリー八世はロンドン市内の“stew”を閉鎖するようにとの布告を出している。布告文の中には「若者が挑発され、誘惑され、肉欲をほしいままにすることが許される」“the youth is provoked, enticed, and allowed to execute the fleshly lusts”という一節があり、この種の施設が誘発する若者への悪影響を意識していることをうかがわせる。しかし、この布告は効力を発しなかったようである。Fabricius,75-77.

19）梅毒の歴史や治療法、社会に与えたインパクトについては多くの著作がある。ここではイングランドを襲ったさまざまな伝染病に関する先駆的な著作であるCharles Creighton著の*History of Epidemics in Britain*,（Cambridge UP, 1894, Frank Cass & Co., London, 1965）による。イングランドにおける梅毒の発生とそれに関する著作、社会的･宗教的反応については、415頁以降を参照。

20）Fabricius, 67-71.

21）The English Experience, 443, Theatvm Orbis Terravm Ltd., Da Capo Press Inc., New York, 1972. なお筆者による翻訳が「埼玉学園大学紀要」人間学部篇第14号、15号に掲載されており、日本語訳はこれによる。

22）Margaret Healyはクロウズのこの一節を取り上げて、梅毒菌は体外では長く生存できないのでトイレの便座による感染説は不当であると言っている。空気感染説が一般的であったペスト同様に、クロウズは公衆衛生上の管理の重要性を指摘したのであろう。*Fictions of Disease in Early Modern England*, Palgrave, 2001, 123-26.

23）Fabricius, 17-20,『売春の社会史』232。スタブスは「目に見える」形での処罰を望んでおり、演劇的効果を狙っていたとも受け取れる。スタブス自身は演劇を社会悪として激しく攻撃していただけに、興味深い問題である。また『罪と罰の社会史』（森話社）所収の米村泰明「目に見える罪と罰」181-82頁を参照。イシュマエルとダリラの転落のきっかけはサイコロ賭博であり、これもスタブスをはじめとする社会改革者たちが厳しく非難した遊興のひとつである。

24）Healy, 149.